

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

連合「被災地支援第 22 次ボランティア活動」に参加して

BCからバスで陸前高田市へ。中山間地から平野部に入ると車窓からあちこちに「ガレキ」の山が見えてくる。本来、水田地帯であるはずのところ牧草地を思わせる風景。そして沼地が広がってくる。

陸前高田市の中心街は、比較的大きな建物以外は津波で流されたのか使用できず取り壊されたのかわからない。とにかく何も無い更地であった。

市街地を通過するとき、「何か違和感を覚えた。なんだろう…。道路と海岸線が異常に近い。近すぎる!？」…BCに入ったその夜に、「明日の陸前高田市での活動は中止かもしれません。道路が冠水し云々…」との説明があった。その時は状況がよく呑み込めていなかったのだ…。

そうなのだ。聞くところによると陸前高田は地盤が 84 cmも沈み海岸線が 750m内陸に入り込んでいるようだ。高潮や高波の度に道路や市街地が冠水するという。水たまりにみえるところも、大潮・高波になると「湖沼」に変わる。その海水は、なかなか引いてくれない。いつまでも「水たまり」の状態になるという。

現在、海岸線は土嚢を積み上げ浸水を防ぐ工事が盛んに行われていた。高さは 1.5m位だろうか。当面の緊急避難措置なのだろう。

この状態では、人が住むどころか建物を建てることさえかなわない。

この長い海岸線をどうしようとするのか、どのような防潮堤、防波堤を造ろうとするのか…。海水に浸かった田畑をどうするのか…。

私たちが行った田畑の「ガレキ」処理や側溝・用水路の土泥除去も誰かがやらなければ田畑はいつまでも使えない。手つかずの田畑は無数にある。いや、始めたばかりと言ってもよい状態だ。ローマは一日にして成らず。だが、あまりにも先が見えない。

景勝地として知られている高田松原公園の松がただ 1 本を残して 7 万本が流失した。陸前高田の人々が、いつになったら以前のような暮らしができるのか。

被災者が希望を持って生活できるよう被災地の一刻も早い復旧・復興を願わずにはいられない。機会があれば是非参加したいと強く思う。

第22次に日教組グループの一員として北陸ブロックから参加してきました。私は他の4人の日教組組合員と共に主として大船渡市三陸町綾里で側溝上げ活動を行いました。側溝には土砂、家屋の瓦やスレートの破片、ガラス片、台所用品、漁具や大工道具、等々が混然と堆積しており、津波の猛烈さと被災者の恐怖や喪失感を髣髴させました。堆積したものは硬く作業は思いの外ハードでした。



作業の性格上被災者と深く話す機会がありませんでした。現場近くの畑で大津波当日の様子を詳しく語ってくれた高齢女性の穏やかな表情、小学生が挨拶に続けて『ありがとう』と声をかけてくれたこと、通り過ぎる車からの会釈、アイスの差し入れなど、津波から6ヶ月が過ぎて被災者は本来の姿を取り戻しつつあるようでした。しかし真の復興へは道半ば、これからが大事であり更なる支援が求められます。



希望に生きよう東北。活動する我々の姿が被災者を力づけ希望に生きる思いを強めることにつながるように願っています。加えて労働者の連帯と運動強化を願っています。